

STEFANO JEFF BLUES

NO HOME BUT THE BLUES



献辞

道が消えても歩き続けた人たちへ。
傷を音楽に変えた、安らぐことのない心へ。

そして、ブルースの中に故郷を見つけたすべての人へ。

Stefano Jeff Blues

No Home but the Blues

ミシシッピ・デルタ。川は絶えず流れ、朝日が昇るたびに新しい希望が生まれる。その土地で、ほとんどすべてを失ったジェイコブは旅に出る。

人々は言う。「川は後ろへ流れない」。やがてジェイコブは、人生も同じだと知る。一マイル進むごとに、より良い日々はいつも道の先で待っているのだと気づいていく。

これは、すべてを失ったと思っていた男が、人生で最も美しい章はまだ始まったばかりだと知る物語である。

収録曲

- 01 Dust on My Boots
- 02 The Devil Didn't Show
- 03 Whiskey Rain Sunday
- 04 Train Bound for Nowhere
- 05 Letters in the River
- 06 One More Mile of Blues
- 07 Broken Strings and Promises
- 08 The Last Juke Joint
- 09 Crossroads After Midnight
- 10 When the Morning Finds Me

トラック 01

Dust on My Boots

最初の数マイルがいちばんつらい、と人は言う。ジェイコブは夜明け前に町を離れる。顔には微笑み、胸には火がある。目の前には広い道が続き、デルタを踏みしめるたびに希望が満ちてくる。

失ったものの記憶はまだ残っている。しかし、もう彼を押しつぶしはしない。使い古したリュックを肩にかけ、希望を連れにして歩き続ける。

夕暮れ、ジェイコブはブーツの埃を見て微笑む。それはもう汚れではない。前へ進んだ証しであり、次の曲がり角に待つ何かへ近づいた印だった。

The Devil Didn't Show

嵐の夜、ジェイコブは古い十字路へ向かう。デルタでは、絶望した者が答えを求めてそこへ行くという噂が絶えない。近づくにつれ、胸の高鳴りは不安へ変わっていく。

雷鳴がうなり、稲妻が空を裂く。曲がりくねった木の下で真夜中を待つが、風と雨のほかには何も現れない。

そして、本当に何も起こらなかった。

ジェイコブは震えるように笑う。悪魔には、自分へ差し出せるものなどないのかもしれない。夜明けとともに恐れは薄れ、彼は自分の意志で未来に向き合う決心をして十字路を去る。

トラック 03

Whiskey Rain Sunday

冷たい日曜の雨に追われ、ジェイコブはクラークスデイル郊外の小さなジェーク・ジョイントへ入る。煙草の煙、こぼれたバーボン、歳月に擦り切れた物語が空気を満たしている。

窓を叩く雨の音に、古いピアノが低く応える。音は沈み、また高く昇る。疲れた魂が、それでも倒れまいとするように。

誰もが重荷を抱え、誰もが自分の道を走っている。ブルースは悲しみでも敗北でもない。傷ついた心が、もう一度立ち上がるための音なのだ。

雨がやむ頃、ジェイコブは自分がひとりではないと知る。彼もまた、同じ古い歌の一節だった。

トラック 04

Train Bound for Nowhere

日暮れ、ジェイコブは南へ向かう貨物列車に飛び乗る。車輪はゆっくりしたブルースの拍を刻み、闇が線路を包む。

同じ車両の老いたハーモニカ奏者は、夜を物悲しい旋律で満たし、こう言う。「どこへ行くかじゃない。動き続けることが大切なんだ」。

開いた扉の向こうを影と遠い灯りが流れていく。町と町の間で、ジェイコブは旅そのものこそ探していたものなのかもしれないと悟り始める。

Letters in the River

グリーンヴィル近くの川辺で、ジェイコブは古い手紙の束を手にする。愛した人からの手紙。そして、送れなかった自分の言葉。彼は一通ずつ声に出して読む。

一行ずつ、一頁ずつ、悲しみを手放し、怒りを手放す。

手紙を水面へ置くと、ミシシッピは過去を乗せて南へ流れていく。

川は留まらない。川は待たない。古い重荷を彼方へ運んでいく。

最後の手紙が消えた時、ジェイコブは初めて昨日を置いていけると感じる。

One More Mile of Blues

夏の熱気が重い毛布のようにデルタを覆う。ジェイコブは小さな町と埃っぽい道を歩く。木陰では老人たちがドミノを打ち、遠くの畑には教会の鐘が響く。

未亡人は喪失と再生を語り、農夫は厳しい年月と踏みとどまる強さを語る。どこへ行っても、それぞれの歌がある。

一節ずつ、一マイルずつ、悲しみはやがて力へ変わる。

誰もが違う言葉と違う靴で、自分だけのブルースを歌っている。さらに一マイルのブルースは、さらに一マイルの知恵となる。

トラック 07

Broken Strings and Promises

ある夜、ジューク・ジョイントで演奏中のギターの弦が切れる。

弦が弾け、旋律が消える。災いは時に早すぎる。

客が去った後、ジェイコブは明滅する街灯の下で弦を張り替える。

一本ずつ、一音ずつ。壊れたものを直すことが、人を沈ませずに支えてくれる。

最後の和音は澄み、強く響く。傷は残っても、それが歌を強くする。

トラック 08

The Last Juke Joint

デルタの奥深くで、ジェイコブはブルースが今も生きる古いジューク・ジョイントを見つける。

ステージに上がると、すべての距離、喪失、学びがギターを通して流れ出す。

一音ずつ、微笑みひとつずつ、彼は自分のブルースを価値あるものへ変えていく。

歓声の中、ジェイコブはもう迷子ではない。ここが家なのだと感じる。

Crossroads After Midnight

旅立ちから数か月後、ジェイコブは星空の下、別の十字路へたどり着く。
今度は答えを探すためではない。ここまで運んでくれた道を祝うためだ。

虫の音が響き、ブーツが拍を刻む。暖かな夜は生きている。

一歩ずつ、一マイルずつ、彼は自分のリズムと微笑みを取り戻した。

十字路はもう警告ではなく、招待のように見える。

手を叩き、くると回れ。打ちのめされたままでは、人生は短すぎる。

心は軽く、足は自由だ。ジェイコブは明日へ向かって踊り出す。

トラック 10

When the Morning Finds Me

ミシシッピに朝が訪れる。ジェイコブは木の栈橋に座り、膝の上にギターを置く。空は金色になり、鳥が歌に加わり、川は自分だけの優しい旋律で流れる。

太陽が昇り、影が消える。歩いた一マイルーマイルが、彼の奏でた歌になる。

失ったものをすべて取り戻したわけではない。だが、それより大切な平穏を見つけた。友人、温かな町、そして傷を知る前から彼の歌を愛した人も。

一節ずつ、一日ずつ、ブルースが道を示してくれた。

ブルースはもう重荷ではない。それは彼の声であり、仲間であり、故郷である。

川は流れ続け、太陽は輝き続ける。心はデルタの夜を越えて歌い続ける。

暖かな風に喜びの旋律を乗せる。前にはハイウェイ61のように広い道が伸び、すべてがようやく正しい場所にあるように感じられた。

NO HOME BUT THE BLUES

川は流れ続ける。
心は歌い続ける。

物語・アルバム構想：Stefano Jeff Blues

ミシシッピ・デルタをめぐる個人的な旅を、十曲で綴った物語。